

平成27年度 とらいあんぐるん大学連携講座 「文学・芸術の世界で男女共同参画を考える」報告

東京家政大学女性未来研究所(樋口恵子所長)と共催で、文学・芸術を通してジェンダーや男女の生き方について考える連続講座を開催しました。

【第1回】11/7(土)
『赤毛のアン』とジェンダー
講師：伊藤節さん
(東京家政大学 教授・女性未来研究所 副所長)

【第2回】11/21(土)
「日本映画界でみる女性の活躍」
～映画と生きる女性たち～
講師：志尾睦子さん
(シネマテークたかさき 総支配人)

「赤毛のアン」のアンは1869年生まれ、1874年生まれの作者ルーシー・モンゴメリと同じ時代環境を生きたこととなります。ちなみに訳者の村岡花子は1893年生まれです。モンゴメリは事実上孤児であり、頑固な祖母を長きにわたって世話し、若い時代の多くを失いながら「赤毛のアン」を書きました。牧師の妻となりますが、憂鬱症の夫を世話し、やりくりしなければならぬ結婚生活でした。女性であるが故に生きることへの苦悩を抱えていた彼女は、本心を日記を書くことで自分を支え、膨大な日記を残して自死します。死後50年間封印され、90年代初めより刊行が始まった日記からは、彼女の思いがアンの中に複雑に反映していることが分かってきています。それは、日本の女性たちの意識に現在に至るまで通じるものがあるのではないのでしょうか。(参加者：60人)



日本で初めて映画がつけられたのは1898年ですが、1980年まで映画制作の現場で女性がつける仕事は、女優、スクリーンライター(記録係)、付き人、ヘアメイク、衣装に限られていました。男社会であった日本映画界を切り開いたのが、浜野佐知監督です。当時、女性が監督になれる唯一の場所であったピンク映画界で監督デビューし、いつか本当に撮りたいものを撮るために400本にもものぼるピンク映画を撮り続けました。そして、「第七官界彷徨 尾崎翠を探して」を制作します。これは、女性が女性監督を応援し、出資金を募った自主映画で、日本では初めてのケースでした。現在、80年代生まれの女性監督が次々と生まれ、現場でも女性の活躍がめざましい業界となりましたが、ここに至るまでには、制作や配給・宣伝、上映の現場で日本映画界を支えてきた女性たちの努力があったのです。(参加者：48人)



【第3回】11/28(土)
「描く女、描かれる女」～美術とジェンダー入門編～
講師：西山千恵子さん
(青山学院大学・慶應義塾大学 非常勤講師)

【第4回】12/5(土)
「女性に作曲はできない?」
～音楽のジェンダーを考える～
講師：小林緑さん(国立音楽大学 名誉教授)



社会が豊かになり、美術情報は私たちの身の回りに溢れています。でも、ダ・ヴィンチ、レンブラント、ゴッホ、ピカソなど、私たちの知っている「有名画家」は男性ばかりです。女性の芸術家ははなからなかったのでしょうか。最初のジェンダー美術史は、いとされていた女性画家を再発見して美術史に追加していくこととするものでした。口火を切ったのは、アメリカの美術史家リンダ・ノックリンで、論文「なぜ女性の大芸術家は現れないのか」において、それまでの「女性には生まれつき偉大な芸術的創造力、能力は備わっていない」という生物学的決定論に反論し、「女性の芸術活動を妨げた社会的、文化的制度」を明らかにしていきます。その後、それでも絵を描き続けた女性芸術家の「再発見」作業が次々と続きます。(参加者：40人)

学校音楽室には偉大な作曲家の肖像画が飾られています。すべて男性です。女性に作曲はできないのでしょうか?いえ、実は女性作曲家も多数存在しています。女性の曲は価値がないのではなく、ただ知られていないだけなのです。音楽史から女性作曲家が消えた理由として、よく知られた曲が女性のものではないという思い込みや女性の創造性や専門性を否定するというジェンダーの問題が考えられます。そのような理由から女性の作と気づかれなかった例として、「乙女の祈り」「愛の賛歌」「ベサメ・ムーチョ」などがあげられますが、実際に聴いてみると、性別を意識することなく素晴らしい作品だと感じるはず。そして、日本にも吉田隆子という女性作曲家がいたことを今だからこそ知って欲しいと思います。(参加者：47人)



学校の音楽室には偉大な作曲家の肖像画が飾られています。すべて男性です。女性に作曲はできないのでしょうか?いえ、実は女性作曲家も多数存在しています。女性の曲は価値がないのではなく、ただ知られていないだけなのです。音楽史から女性作曲家が消えた理由として、よく知られた曲が女性のものではないという思い込みや女性の創造性や専門性を否定するというジェンダーの問題が考えられます。そのような理由から女性の作と気づかれなかった例として、「乙女の祈り」「愛の賛歌」「ベサメ・ムーチョ」などがあげられますが、実際に聴いてみると、性別を意識することなく素晴らしい作品だと感じるはず。そして、日本にも吉田隆子という女性作曲家がいたことを今だからこそ知って欲しいと思います。(参加者：47人)

女子高校生対象の理工系セミナー 「リコ・チャレ・ぐんま 2015」

このセミナーは、女性の進出が少ない理工系分野の魅力女子高校生に伝えるため、県内企業、群馬大学理工学部及び県教育委員会と連携して、実施しているものです。今回は、県立桐生女子高校の生徒及び保護者を対象に企業訪問、講演会、講義と実験を行いました。

●第1回 7/24(金)
明星電気(株)を訪問。
企業見学と女性技術者との交流
(参加者：生徒30人)



●第2回 9/17(木)
講演会「理工系女子の活躍最前線」
講師：板橋英之教授(群馬大学大学院 理工学府)
(参加者：生徒203人、保護者98人)



●第3回 11/14(土)
講義と実験「渡良瀬の銅を調べよう!」
講師：板橋英之教授
(参加者：生徒23人)



◎アンケートから
・女性技術者の方に理系の魅力などを聞き、自分のしたいことをやれば良かったと思った。
・関心がより高まり、理工系を進路のひとつとして考えたいと思った。視野が広がった。

キャリアアップネットワーク支援事業

「とらいあんぐるんサロン」10/24(土)「企業戦略としての女性活躍推進とテレワーク」
講師：都丸一昭さん(一般社団法人ママプロぐんま代表理事)

センターでは、世代や職域を超えたネットワーク作りと女性のキャリア形成を支援するためのセミナーや交流会を開催しています。今回は、情報通信

技術を活用した場所や時間にとらわれない柔軟な働き方「テレワーク」について学び、参加者同士の意見交換を行いました。(参加者：15人)



まめ知識 日本は男性の家庭参画が極端に低い!?

最近では、育児に積極的な男性(イクメン)も増えていますが、日本における男性の家事・育児への参画は、本当に進んでいるのでしょうか?総務省の調査によると、夫婦ともに有業で、5歳以下の子どもがいる世帯の1日あたりの家事関連時間(家事・育児等に要した時間)は、夫が1時間15分に対して、妻は5時間31分と、夫婦間で4倍以上の開きがあります。欧米諸国でも開きはありますが、夫の家事関連時間は2~3時間程度あり、妻との差は約2倍であることから、日本における男性の家庭参画が極端に低い状況

がうかがわれます。一方、昨年、大手保険会社が実施した「47都道府県別生活意識調査」によると、『夫がよく家事に参加している』と回答した方の割合が群馬県は48%に上り、東京都と並んで全国1位という結果がでてます。性別役割分担の考え方や男性中心の労働慣行など、人々の意識や社会の仕組みを変えるには、まだまだ多くの時間が必要です。まずは、それぞれの家庭で、家族の役割や分担について話し合うことから始めてみませんか?

